神風特攻隊と知覽特攻平和會館の讀法*
－日本の戰爭と平和に對する誤った教え－

朴均燮**
kspark@knu.ac.kr

<目次>

1. 特攻の發見、神風特攻隊
2. 特攻の聖地、知覽特攻平和會館
3. 特攻と平和の組合と教育問題
4. 課題と展望

主題語: 神風特攻隊(Kamikaze Special Attack Corps)、靖國神社(Yasukuni Shrine)、知覽特攻平和會館(Chiran Peace Museum for Kamikaze Pilots)、15年戰爭(Fifteen Years War)、ガラパゴス症候群としての平和(Peace as a Galapagos Syndrome)、誤った教え(miseducation)

1. 特攻の發見、神風特攻隊

第2次世界大戰の末期に日本軍は神風特攻隊(Kamikaze Special Attack Corps)を組織して自殺攻擊/自殺防禦の方式で戰爭を遂行した。神風特攻隊の初めての特攻作戰は1944年10月20日、フィリピン中部のレイテ(Leyte)灣に上陸を開始した米軍の艦艇を對象として成された。死んでこそ靖國神社の神として、あがめられる一般兵士とは違って、神風特攻隊は特攻を志願した瞬間からすでに神(軍神、神兵、神翼、神鷲)の地位を與えられた。

日本軍が飛行機の操縱士を補充する方法は主に陸軍少年飛行兵學校(以下、少飛)[1]と陸軍

---

* 本稿は、韓國日本近代學會の第30回國際學術大會(2014年11月1日、鹿兒島國際大學)で発表した論文を修正･補完したものである。

** 慶北大學校 教育學科 副教授

1) 少年飛行兵は從來一年の豫備教育(東京航空學校)を經ることになっていたが、別に直接この豫備教育を經ずにすぐ操縱等の教育を始める乙種少年兵制度をつくることにして、戰局の急に應ずることにした。これらは逐次效果をあらわしてはきたが、何といっても弱い小さい基盤の上に立ってのことなので、到底尨大なる米國に對抗することができなかったのは言うまでもない。往々、航空重點に徹し方が足りない結果日本航空が貧弱だったという人もあるが、當時の日本軍として、他の地上關係全部を犧牲としていても、到底日本の從來の工業力からいって米英に對抗できなかったということは確言できる(西浦進、2013：243)。アジア･太平洋戰爭も末期、本土決戰にそなえて鹿兒島縣下全域に地下壕陣地がつくられ、急造された飛行場から特攻機が出擊した。鹿兒島市をはじめとして多

特別操縱見習士官(以下、特操)を通して成り立っていた。飛行機の操縱士は彼らの選擇であったが神風特攻隊員になるのは彼らの自發的な選擇だとは見做しがたい。朝鮮人出身の神風特攻隊員では印在雄(少飛13期)、金相必(特操1期)、卓庚鉉(特操1期)、李賢宰(少飛14期)、朴東勳(少飛15期)、韓貞實(少飛15期)等がよく知られている。

少年飛行兵學校13期の印在雄(松井伍長)は1944年11月29日、レイテ灣に碇泊中であった米軍輸送船團に本體攻擊を敢行して亡くなったという事實により、當時の半島を代表する神としてあがめられた。印在雄は亡くなったことから“半島の靖國(隊)の神鷲”として記憶されるようになった(每日申報、1944年12月2日、12月5日)。朝鮮人特攻隊員としての初めての戰死者であった印在雄に對して盧天命は<神翼：松井伍長靈前に>(每日申報、1944年12月6日)を通して、徐廷柱は<松井伍長頌歌>(每日申報、1944年12月9日)を通して、『每日申報』は<松井伍長に從おう>(每日申報、1944年12月2日)という社說をを通して彼の死を大々的に宣傳した。當時の學校では印在雄を育てたことを敎育者の自慢だと興奮し(<敎育者として自慢>：見原校洞國民學校長談。每日申報、1944年12月3日)、全校生徒が印在雄のように總蹶起しようと煽動した(<全校生徒總蹶起一第二第三松井伍長輩出>：元開高校長談。每日申報、1944年12月3日)。開城では印在雄の死に報いるということで愛國機を購入する費用として軍府に10万ウォンを獻納することもなされた(每日申報、1944年12月20日)。

印在雄下士は1944年12月28日付で少尉に特別昇進した。その破格の恩典に人々は感激し、印在雄の父親も皇恩に感泣した(每日申報、1944年12月28日)。次には遺族の對應であった。印在雄の母親は女工を志願し、妹は女子挺身隊を志願した(每日申報、1945年2月15日)。しかし後に分かった事實であるが當時、印在雄は死んではいなかった。印在雄は1946年1月、アメリカの捕虜輸送船に乘って月尾島を經て仁川に上陸した。當時、『ソウル新聞』は“堂々と生きている人を死んだと僞りの報道をし、世間の人をだましたことだけから推察しても帝國主義日本の淺はかな宣傳政策がどれほど可憎していたかが分かる”と批判した(ソウル新聞、1946年1月10日)。ところがその『ソウル新聞』の前身がほかならない『每日申報』であった。

日本の極右は神風特攻隊が誇らしく自爆したと主張したが、實際に愛國心があふれる操縱士が僅かはいたかも知れないが相當數はそうではなかった。彼らが特攻機に乘る時にはまともに歩くこともできず、泣き叫ぶ操縱士を無理にコックピットに押込まなければならないほどであった。特攻隊は連合軍の應戰態勢にも警戒心を與え、かえってこの攻擊方式

くの軍事基地周辺の都市が空襲で燒失した。同時に薩摩海軍の傳統もここに消えた(鹿兒島縣高等學校歷史部會、1977：12)。

が日本に原爆が2度も投下される口實を提供したという見解もある。九州最南端の鹿兒島縣知覽町にはアジア・太平洋戰爭末期の神風特攻隊の前進基地があった。公園の一方には神風と關連した資料などを展示する二つの特攻記念館(知覽特攻平和會館、ホタル館・富屋食堂)が建っている。知覽から出擊して犧牲になった神風特攻隊員は1,036人と言われるがこの中には11人の朝鮮人もいた。この鹿兒島は特攻と平和という全く釣り合わない二つの單語がぎこちなく組合わされている所でもある。

今まで神風特攻隊と知覽特攻平和會館に關しては、1990年代以來、現在までに歷史・思想・政治・文化・軍事・映畵などの場面で論議されている(相星雅子、1992；赤羽禮子・石井宏、2001；Ohnuki-Tierney、2002；大貫惠美子、2003、2006；Tanaka、2005；O、2011；길윤형、2012；박진한・강태웅・한정선・이택광・신하경、2013)。本考察では、今までの論議に留意しながらも、神風特攻隊と知覽特攻平和會館を基点とする戰爭と平和と敎育の問題に對して論議するつもりである。この論議は、戰後日本の戰爭・平和・敎育論を日本の政治的磁場と意識の流れおよびその關係力學に注目して考察することである。

2. 特攻の聖地、知覽特攻平和會館

『韓國日報』が情報公開法(FOIA)に基づく情報公開の要求としてアメリカ中央情報局(CIA)から單獨入手した第2次大戰の秘密文書によれば米軍は靖國神社を日本軍の精神的背景であると分析している。アメリカの戰略諜報局(OSS：CIAの前身)で作成した報告書(Japan's Secret Weapon：Suicide、R & A 3301S、1945.7.20)によれば、米軍をはじめとする連合軍を當惑させたことは日本軍の自殺攻擊/自殺防禦という極端な選擇であった(Office of Strategic Services Research and Analysis Branch、1945)。この時、アメリカが差し出したカードは"日本全滅"という威嚇であった。日本と日本人の全滅の可能性を豫告する何かの對應措置があってこそ彼らが死ではない降參を選擇するだろうという結論に到達したのである。その對應措置は當時すでに開發を終えた原子爆彈の使用を意味していた(韓國日報、2014年4月25日)。

報告書が作成されて一週間後となる8月6日、米軍爆擊機(B-29)が廣島に原爆を投下した。日本軍指導部が兵士たちに死ねばその魂は靖國神社で永生を享受すると宣傳したことが神風特攻隊のような自殺攻擊と自殺防禦につながり、これが逆に米軍の原爆攻擊の決定

を招いたと見ることができる。安倍晋三は機會があるたびに靖國神社參拜を擁護して、これは國家のために限りない犠牲を果たした魂を替えるという論理を展開した。ところがまさにその國家のためだという限りない犠牲(自殺攻撃/自殺防御方式)こそ日本國家の全滅威嚇まで招いた張本人であったという事實を見逃してはならない。

近代以前の鹿児島県(薩摩藩)は“郷中”と呼ばれる、地域社會をベースにした特別な教育システムで有名であった。この鹿児島県はアジア・太平洋戦争のあとには、“特攻の聖地”として記憶されている2)。知覽特攻平和会館の展示館のパンフレットは次のように書いている。

> 世界恒久平和を願いながら…：この知覽特攻平和會館は、大東亞戦争末期(戦後は太平洋戦争ともいう。)の沖縄戦で、人類史上類のない爆裝した飛行機もろとも敵艦に體當りした陸軍特別攻撃隊員の遺影、遺品、記錄等貴重な資料を收集・保存・展示して當時の眞情を後世に正しく傳え世界恒久の平和に寄與するものです。/知覽は、昭和16年(1941)、大刀洗陸軍飛行學校知覽分教所が開校、少年飛行兵、學徒出陳の特別操縦見習士官らが操縦訓練を重ねていましたが戦況が緊迫し險惡となり遂に昭和20年(1945)本土最南端の陸軍特攻基地となり、20歳前後の若い隊員達が滿州・日本內地から集結しては、家族・國の將來を思いながら出撃した地です。/沖縄戦で特攻戦死された1,036名の隊員は、知覽基地を主軸として萬世・都城基地から、第8飛行師團は臺灣各基地、義烈空挺隊は健軍(熊本)基地から出撃しています。/この地が特攻隊の出撃基地であったことから、沖縄戦の特攻作戦で戦死された隊員の慰靈に努め、當時の眞の姿・遺品・記錄を後世に殘し、この史實を多くの方に知っていただき、特攻をとおして戦争のむなしさ、平和の大切さ・ありがたさ、命の尊さを訴え、後世に正しく語り繼ぎ恒久の平和を祈念することが基

2) 近代以前の鹿児島の歴史と教育文化を略述しながら、近代以後の特攻の聖地となった鹿児島に對して考察する必要がある。鹿児島では戦國時代から、“郷中”と呼ばれる、地域社會をベースにした教育システムが廣く普及していた。いまのような學校がなかった時代のことだけに、朝から夕方まで同じ地域に住む仲間と時間を過ごせば、互いに切磋琢磨する中で一人ひとりが人格を形成していく作業も濃密なものとなりそうだ。當然のこと、薩摩士族には獨特の氣風がつちかわれていった。郷中とは、鹿児島城下の場合、ある一定の廣さで18の地域(方限と呼ぶ)に分け(幕末當時は33地域)、そこに住まう武士(階級・地位を問わない)の6歳から15歳の男の子が、ともに學んだり體を鍛えたりする場である(佐藤正典外、1997；金藏照雄、2003；岩中祥史、2012)。薩摩藩主島津重豪(1745~1833)は薩藩士風の變革をはかり、同時に教育制度を改革し、藩校造士館によって指導者の養成をはかろうとした。そして、ふたたび修正をくわえたのが島津齊彬(1809~1858)だ。島津齊彬は郷中における舊來の教育を修正しつつ、島津重豪以來の造士館教育とあわせて、藩政に參加しうる有用人物の育成をはかった。しかし西南戦争(1877)以後、島津齊彬のめざした知的教育を近代的學校教育にゆずった學舍は守舊的な世情と先進的な指導者を失って、ふたたび傳統的教育をまもりつたえる機關となった。西南戦争の殘した傷痕はあまりにも大きかった。前代までの進取の氣性はうすれ、改革をこのまない守舊的な空氣に一變した。戦前までは多くの學舍が建物をもち舍生も多かったが、戦後住民の交代・流入などによって、復活された學舍はすくない(鹿児島縣高等學校歴史部會、1977)。

地のあった住民の責務であろうと、特攻基地跡の一角に知覽特攻平和會館(昭和50年から昭和61年は知覽特攻遺品會館)を建設しました。/毎年5月3日知覽特攻基地戦没者慰霊祭には全國から参拝者が訪れています。　(鹿兒島縣南九州市、2014)

知覽特攻平和会館にはアジア･太平洋戦争末期の沖縄戦で亡くなった自殺特攻隊員の遺書や写真など約１万４千点を収蔵しているが、この中で本人の名前や部隊名、日付のほか、直筆と確認できた遺書や手紙など333点をユネスコ(国連教育科学文化機関)の記憶遺産として登載の申請することにした。鹿兒島縣南九州市の霜出勘平市長は2014年2月4日の記者会見で“明日、命はないという極限の状況で隊員が残した真実の言葉を保存･継承し、世界に戦争の悲惨さを伝えたい”と話した(日本經濟新聞、2014年2月4日)。しかし、南九州市の記憶遺産の申請は2014年6月12日に開かれたユネスコ日本委員會による初の選考で候補４件から２件に絞られる際に除外された。霜出勘平市長は2015年5月13日、日本外国特派員協会で記者会見し、知覽特攻平和会館にある特攻隊員の遺書や手紙などの資料に関し、ユネスコの記憶遺産登録を再び目指すと表明した。今度は特攻隊員と交流があった女学校の生徒の日記なども新たに構成資料に加え、近く申請の手続きをする。韓國と中國両国の批判を念頭に“特攻の賛美や正当化が目的ではなく、二度と戦争を繰り返さないためだ”と登載申請に理解を呼び掛けた。会見で、知覽特攻平和会館を訪れた経験がある外国人記者が“特攻隊員は美しい犠牲”という印象を受ける説明だったと指摘すると、霜出勘平市長は“戦争の悲惨さを前面に出しているが、努力不足だった。誤解を招かないように取り組みたい”と説明した(産經新聞、2015年5月13日)。

本來その遺書や手紙は出撃に際した所感や家族に送った最後のものであった。それは命令にともなう展示用の遺書を書くことであった。嚴格な檢閲の下、他の兵士たちを死への作戰に引き込む目的で作成された“地獄の招待席”であった。日本を除くすべての國で神風は無謀な人間、狂信的な愛國者、理解することも信頼することもできない他者、さらには自爆テロと同義語にも使われる(정충신、2014)。大貫惠美子は神風特攻隊員が勇敢無雙に武士道を體現した者たちではなく、大部分は單に志願を强要された若者であったと强調した。大貫惠美子は、大半の兵士は強制的に志願させられたと言う。神風特攻隊員の手紙は、書かれた時点で上官の検閲を受けたり、強制的に書かされたりしたのではないかと疑問に思っている。死にたくなかった若者たちが時代と狀況に巻きこまれ、死が定罪となるその道に向かうしかなかったという話である(大貫惠美子、2003、2006；The　Economist、Mar. 1st 2014)。

廣島平和記念資料館をはじめとする日本のその他の戰爭記念物が當然そうであるように、知覽特攻平和會館もやはり過去に對する眞劍な反省を垣間見ることのできる場面は殆どないという指摘である。展示館の中の掲示物やパンフレットなどを見ても死亡者數字などを羅列するだけで、神風特攻隊が出現した背景や戰爭の責任などに對する言及は全くない。

鹿兒島知覽にある知覽特攻平和會館は數多くの觀覽客が訪れてくるほど人氣のある觀光地である。知覧特攻平和会館の入館者は、1975年の開館以来、通算1750万人を数える。年間55万人が訪れ、うち1万人は外国人である。全国から620の小・中・高校の生徒が訪れている。2013年度は過去最多の675校が修学旅行に訪れるなど知覽特攻平和會館は平和学習の一環として、平和教育の場として定着している(木村正人、2014)。このように、知覽は特攻の聖地という村のイメージが作られたのである。明らかにこの名稱は加害者日本に對する省察が缺如した名前である。日本人の中には知覽特攻平和會館を見回して寫眞一枚一枚を見ながら驚いたという反應を見せる場合が多い。ひとりとして恐怖、不安、狂氣、混亂などの感情に迫られる表情ではなくさらには特攻隊員の明鏡止水のような表情に感動したと話す人もいる。彼らには保守論客の渡邊恒雄の“彼らは屠殺場の羊であるだけだった”という話がいつも通用するか分からない。

知覽特攻平和會館には二人の母娘(鳥浜トメ、赤羽禮子)の證言[3]と共に“アリランの歌声/

3) 小泉純一郎が靖國神社を參拜した2005年10月17日、日本の新聞に、ある食堂の女主人である赤羽禮子の訃報記事が載せられた。東京、新宿で30年間余り鹿兒島鄉土料理店を運營してきた赤羽禮子が出したノンフィクション(『ホタル歸る：特攻隊員とトメと娘禮子』)は2001年ベストセラーとなった。アジア・太平洋戰爭末期、母の鳥浜トメ(1992年死亡)が鹿兒島の知覽で運營した軍指定食堂(富屋食堂)を舞臺として母と若い神風特攻隊員の話を扱った。朝鮮人出身の神風特攻隊卓庚鉉に對する話は書物(『ホタル歸る：特攻隊員とトメと娘禮子』、2001)と映畫(『ホタル』、2001)に登場して知られるようになった。そして2008年5月10日には黑田福美の卓庚鉉慰靈碑の建設問題で論難もあった。一連の問題は1990年代以後、バブル經濟の崩壞により自國の歷史と思想を再考しようとする動きと力學關係がある。その力學は日本の植民地支配と戰爭責任を否定する大衆書籍と歷史教材を製作・展示・販賣するということと共に神風特攻隊員の死を讃美する方向のエネルギーという事實に留意する必要がある。南九州市の霜出勘平市長は神風特攻隊員の死を通して世界に戦争の悲惨さを伝えたいと話したが、彼の主張を純粹に受け入れるには周邊の狀況(タイミング、右翼の蠢動)が悪すぎる。2013年末の安倍晋三の靖国神社参拝以来、英国をはじめ、海外では日本の右傾化を懸念するニュースが氾濫している。特攻隊をテーマにした小説『永遠の0』(2006/2009)がベストセラーになり、映画(『永遠の0』、2013)も大ヒットした。『永遠の0』を鑑賞した安倍晋三は、映画に“感動した”と述べた。『永遠の0』の著者百田尚樹は安倍晋三と親しい。安倍晋三は2013年、日本放送協会(NHK)の経営委員に百田尚樹を任命した(木村正人、2014)。百田尚樹が感じ取ったメッセージは、当時の若い男性は今日の草食男(herbivorous　youth)とは大違いで、男らしく、目的を持っていたということだ。百田尚樹の意見は保守派にしても右寄りで、2014年2月の東京都知事選でやはり右派の田母神俊雄の選挙応援に駆け付けた際、1937年に日本兵が中国民間人を殺した南京大虐殺は“なかった”と言い放った。『永遠の0』が映

とほく母の国に/念ひ残して/散りし花花”という碑文も刻んでいる。知覽が特攻の村になった由來は眞珠灣奇襲の直後である1941年12月末、大刀洗陸軍飛行學校知覽分教所が設立されたところにはじまる。會館周邊には惡い夢をよい夢に變えるという觀音菩薩がある特攻平和觀音堂[4]、護國神社、生存同期生らが期數別に建てた追悼碑がある。特に知覽特攻平和會館はアジア・太平洋戰爭という歷史的な脈絡が消去されたまま、特攻作戰が展開した1945年の春(1945.3.26~7.19)を時間帶に設定した展示が成り立っている。この展示は戰爭の脈絡が消去された展示という点で始めから歷史の歪曲を胚胎していると言える。

また、知覽特攻平和會館は神風特攻隊に對してノスタルジアで覆われた感傷主義を展示しているという特徵を持つ。感傷主義が展示される限り、戰爭の慘狀に對する省察と批判は期待し難い。その点から見るならば、知覽特攻平和會館で、靖國神社參拜を押し切った小泉純一郎と極右發言を憚らない石原愼太郎の名前に出會うということは、ともすればあまりにも當然のことかも知れない[5]。知覽特攻平和會館の展示物のどこにも朝鮮人がなぜ戰死者の名簿にあるのかを說明する場所はない。ここでは日本の若者たちを悲劇的な死のどん底に追い詰めた指導部の誤りを指摘する內容も探せない。全般的にとんでもない死に追い遣られたあどけない青年たちの魂を賣って觀光の特需を樂しんでいるという印象を消すことはできない(김효순、2010)。

画館を埋め尽くしている頃、南九州市はユネスコの世界記憶遺産への登録を目指し、神風特攻隊に関する文書(特攻隊パイロットの別れの手紙や日記、詩、など)を提出した。だが、映画も一連の文書も、神風特攻隊員の姿を正しく伝えていない。右派は彼らのことを、お国のため雄々しく死んでいった意欲的な戦士として描こうとする。韓国はこうした動きに反発しており、中国も予想通りの怒りを見せている(The Economist、Mar. 1st 2014)。

4) 廣大な木佐貫原臺地の一部に、特攻平和觀音堂がある。戰時中は陸軍の特攻基地となり、多くのわかい勇士がここをとびたって沖縄の空に散華していった。久遠の平和をもとめ、毎年五月二十八日には例祭が行なわれている(鹿兒島縣高等學校歷史部會、1977：129)。

5) 特攻隊に關する雜誌記事(日本國立國會圖書館、http://www.ndl.go.jp/jp/data/diet.html)を見れば2001年以後特攻隊に關心が急增したということがわかる(남상구、2007：156-157)。これは總理在任期間のうち高い支持率を維持した小泉純一郎が就任の始めに“總理になった今難しいことがあれば特攻機に乘った青年たちの心得と私自身を比較する。……すると今私が體驗している困難は何でもないという氣がして再び蹴飛ばして立ち上がる”と强調し、靖國神社の參拜を押し切ったことと密接な關係がある。また、石原愼太郎は自身が製作總指揮を引き受け、鳥浜トメの觀點で特攻隊員を描いた映畵(『俺は、君のためにこそ死ににいく』)を作って“苛酷な時代を生きた日本人の美しい姿を殘したい”と製作の意圖を說明した。このように國家のアイデンティティと共同體の崩壞に對する右派の危機意識は鹿兒島を據點とする神風特攻隊に對する關心を高める要素であった(朝鮮日報、2015年5月22日)。

3. 特攻と平和の組合と教育問題

花のように美しい若い年で死んでいった神風特攻隊員は武士道を體現した人として描寫されているが、實際には志願を强要され、避けられない死を目の前にしたひとりの若い青年に過ぎなかった。大貫惠美子は學徒兵出身の神風特攻隊員が書いた日記、手記、手紙を中心に彼らの精神的な苦惱と葛藤を紹介している(大貫惠美子、2003、2006)。若くして無念な死に追い遣られた學徒兵の手記を分析し、この不憫な魂が死に直面した時の精神現象を探り、彼らが國家の宣傳工作とは違った實狀を持ったまま死んでいったことを語っている。彼らは出征の前日までも自らの死を受け入れられず、苦しんでいたということが分かる(大貫惠美子、2006)。彼らは國家によって定罪となる死の道に追い込まれて行ったのである。

しかし、大貫惠美子は神風特攻隊問題を日本とアメリカの關係の中で扱った。1941年にアメリカという耐えがたい敵を呼び出す時まで日本が東アジアで何をしたのかに對する觀點が抜けている。大貫惠美子は神風特攻隊員が持った歴史觀と世界觀を繼承したと言える。日本帝國主義が行った植民地の朝鮮人に對する抑壓や中國人の殺傷に對しては沈黙して歐米帝國主義の植民政策を批判しながらも日本が主に主張した大東亞共榮圈を擁護する二律背反に陥っている(大貫惠美子、2006)。

特攻と平和という單語が共についた知覽特攻平和會館では世界の恒久的･普遍的な平和と辨別される日本式話法の平和に出會うことができる。知覽特攻平和會館の觀點で見れば日本の平和の基礎になった特攻勇士の崇高な精神を忘れてはならず、その精神を後世に繼承していくことが使命であることを明確にしている(知覽特攻平和慰靈顯彰會、2005)。知覽特攻平和會館には10代の少年の犧牲だけ惜しむだけで、彼らがなぜ、何のために死ななければならなかったのか、過去の軍國主義の弊害に對する跡は見られない。悟って反省して未來の再發防止を考えるよりはただ國家のために命を捧げて忠誠をつくした神風の精神を再確認しようという所に位置している。世界の恒久的な平和に盡くすために建てられたと言われるが、案内書の表現のように“あの遠い水平線の向こう側で消えた勇敢で若い戰士ら”の精神を贊えて感動する空間である(京鄉新聞、2005年10月2日)。

日本の戰爭映畫で神風特攻隊を素材にした特攻映畫は別途のジャンルで扱われる程の特別な意味を持つ。特攻映畫は戰爭映畫ながらも始終一貫して自身の不運に對する思辨と憐憫、美化に留まることのできる數少ないジャンルとしてだけでなく、戰爭犯罪を全く考慮

せず、いろいろな言い譯で言い逃れをすることのできるジャンルでもあるからである(佐藤忠男、1974)。特攻映畵は國家/軍の命令により悲劇的な死を迎えた特攻隊員に對する話である。それなのに特攻映畵は數多くの觀客に戰爭に對する加害者意識と自己反省を伴わないまま自己憐憫に陥るようにさせている(박진한·강태웅·한정선·이택광·신하경、2013：21)。このような特攻の記憶を擴大再生産するのに先立つ日本の代表的な人物として、軍國主義の亡靈に捕われて知的成長の止まった少年たちがいた(大貫惠美子、2006)。彼らは日本を再び過去に引き連れていくのに先立っていた6)。

小泉純一郎は神風特攻隊と緣が深い。首相の就任を控えた2001年2月9日には鹿兒島の知覽特攻平和會館を訪問し、ある少年飛行兵の手紙の前に兩手をつき、しばらくひそかにしくしく泣くという政治的パフォーマンスまで行った。2001年4月26日の政權スタート以後、現職の首相として6回(2001年8月13日、2002年4月21日、2003年1月14日、2004年1月1日、2005年10月17日、2006年8月15日)も侵略戰爭を美化する靖國神社を參拜している。小泉純一郎の精神構造(靖國偏執症)は神風特攻隊に關するよじれた戰爭記憶と歷史認識に根元を置いている。よほどであれば保守論客の渡辺恒雄(讀賣新聞グループ會長)はニューヨークタイムズとのインタビューで特攻隊員の手記を讀んで感激の涙を流した小泉純一郎に對して歷史や哲學を知らず、勉强もしない敎養もない人だと酷評した。これに付け加えて、神風特攻隊が“天皇陛下萬歲”を叫んで、勇猛と喜びで行ったというのは全部嘘であり、“彼らは屠殺場の羊に過ぎなかった”としながら“ある人は立ち上がることもできず、基幹兵によって支えられて飛行機の中に押込まれた”と語っている(The New York Times、Feb. 11th 2006)。

戰後、日本社會の責任放棄、あるいは集團的記憶喪失症はあちこちであらわれている。

---

6) 知的成長の止まった代表的な少年たちとしては安倍晉三と小泉純一郎がいる(大貫惠美子、2006、譯者補論、2007)。安倍晉三はアジア·太平洋戰爭A級戰犯の岸信介の外孫である。1963年に企劃した三矢作戰は岸信介が總理時代、防衛廳で立案したことで韓半島再占領(Re-Entry)軍事作戰を稱する。この作戰を設計した防衛廳長官小泉純也が小泉純一郎の父であるという事實に留意しなければならない。小泉純也は岸信介の忠實な部下であった。小泉純一郎と安倍晉三の根元はこのように互いに連結されている。小泉純一郎と安倍晉三の步みは岸信介と小泉純也が成した任事の擴大再生産であるだけのことだ。彼らがラダビノード·パール(Radhabinod Pal)を平和を追求したガンディー主義者であり、良心を守った國際法律の專門家として奉るのも岸信介以來の無責任體制を受け繼いでいるのである。敗戰(日本のいう終戰)60周年の2005年6月には靖國神社にラダビノード·パールの顯彰碑(肖像画包む)が建立された。その顯彰碑には“時が熱狂と偏見とを/やわらげた曉には/また理性が虛僞から/その假面を剝ぎとった曉には/その時こそ正義の女神は/その秤を平衡に保ちながら/過去の賞罰の多くに/そのところを變えることを/要求するであろう”と刻まれた。これはもちろんラダビノード·パールが極東国際軍事裁判=東京裁判(1946.5.3~1948.11.12)で唯一日本の戰犯たちが無罪であることを主張する一方、むしろ原爆を投下したアメリカが戰犯だと主張したためである。

2003年1月26日には教育の再建のための新しい國民運動という評價を受けた重要な集いがあった(砂防會館、2003.1.26)。この集いで二人の元首相(中曾根康弘、森喜朗)は記念演說を通して日本の教育の問題點を次のように語っている(노다니엘、2006：323)。

> 中曾根康弘：現在の教育基本法は個人の自由が强調されて、日本の文化や傳統に對する愛情や公共觀念の育成などが缺けた、どんな國でも通用する無國籍の法律だと言うことができます。
>
> 森喜朗：教育基本法の制定以來50年余りの期間に教育の荒廢化は加速化し、我が國は教育亡國の道を歩いているといっても過言ではありません。戰後の教育改革は教育荒廢という病氣に對症療法で對處してきました。もう拔本的な改革なしでは教育を蘇生させることができません。教育界の憲法といわなければならない教育基本法で“日本のこころ”、“日本のことば”、さらに“次世代を擔う少年に對するメッセージ”を反映させることが要求されています。

日本のこころとことば、それは日本人が戦後、見失ってしまったというだいじなものである。そのゆえ、個人から社会レベルに至るまでのさまざまな問題を生んできたという。さて、日本のこころとことばを象徵的に表しているのは和の精神である。日本人のこころそのものは、聖德太子という史的象徵からの、“和を以て貴しとなす[以和爲貴]”という意味としての和でもある(『日本書紀』、推古紀、12年(604) 夏4月)。和の精神は近代日本の國體イデオロギー(大和魂)、そして平和憲法と教育基本法の改正を通して傳統の尊重と愛國心の育成を强化しようとする日本の保守勢力の世界觀に繫がっている(박균섭、2010)。

中曾根康弘は、『命の限り蝉しぐれ：日本政治に戦略的展開を』のなかで、1947年當時の教育基本法に對して“まず公の概念がない。日本の伝統や文化、歴史がまったく考慮されてない。その上、権利とか個性とか人格、或いは自由とか民主主義とかは豊富に書いてあるが、義務とか責任、国の歴史と伝統、文化、さらには家庭などに対する配慮はほとんどない”と指摘した。そして“この教育基本法は蒸留水である”と言った。教育基本法は、蒸留水のように日本の水の味がしない教育法、卽ち無国籍の教育法だと主張している。この無國籍の教育基本法はブラジルでもメキシコでもどこへ持っていっても適用できる。だからこれを日本国の教育基本法に変えなければならないと言った(中曾根康弘･竹村健一、2003)。中曾根康弘の教育基本法=蒸留水論=無國籍論には、平和憲法と教育基本法の改正を通して日本のアイデンティティを强化(傳統の尊重と愛國心の育成)しようとする自民黨および日本の保守勢力の世界觀がよく表われている。自民黨を中心とする日本內の保守勢力が學力向上と愛國心の教育の强化を骨子で推進してきた教育基本法改正の動きは右傾化する神の

國、日本の支配勢力の精神世界をそのまま見せていると言えよう(Gorden、2002；노다니엘、2006)。中曾根康弘が日本のこころとことばの一つとして使っている“蝉しぐれ”は藤沢周平の長篇時代小説『蝉しぐれ』(山形新聞、1986年7月9日~1987年4月13日連載)から始まる。その點は安倍晉三も同じである。中曾根康弘は“命の限り蝉しぐれ”ということばを使って(中曾根康弘･竹村健一、2003)、安倍晉三は“日本の野山を、蝉しぐれが包んでいます”ということばを使って(朝日新聞、2014)、日本の保守･支配勢力の世界觀と精神世界をそのまま見せている。

2006年(平成18)12月15日、日本の新しい教育基本法が、第165回臨時国会において成立し、12月22日に公布･施行された。新しい教育基本法は、1947年(昭和22)に制定された教育基本法(1947年法律第25号)の全部を改正し、教育の目的及び理念並びに教育の実施に関する基本を定めるとともに、国及び地方公共団体の責務を明らかにするものとした(http://www.mext.go.jp参照)。また、この改正された日本の新しい教育基本法は公教育の失敗を前提に家庭教育の再生を主張し、一人一人の自由を前面に出すより日本という社會集團(國家)を優先視する共同體主義を指向するのに重點が置かれている。改正された教育基本法では、まず第10條に家庭教育に關する條項を新設して國家と地方公共團體が家庭(教育)にまで介入できる權限を付與した点が目につく(박진한･강태웅･한정선･이택광･신하경、2013：26、43)。

教育基本法改正は1990年代中盤以後、バブル經濟の崩壞による社會問題を經濟政策ではない道德教育(特に、家庭教育の强化)を通して解決しようとする保守勢力の政治意圖から始まったものである(中曾根康弘、2000)。當時、教育基本法改正を反對する一般市民と教職員に對抗して安倍晉三內閣を助けた組織は「新しい教育基本法を求める会」(2000年結成)である。その會に所屬した高橋史朗、坂本研二、西尾幹二等は日本の植民地支配と戰爭を美化させるのに先立つ「新しい歷史教科書をつくる會」(1977年結成)を背景にする人物である(박상희、2006)。

神風特攻隊に對する書物(『ホタル歸る：特攻隊員とトメと娘禮子』、2001)と映畵(『ホタル』、2001)は1990年代以後、バブル經濟の崩壞により自國の歷史と思想を再考しようとする動きと力學關係がある。その力學は日本の植民地支配と戰爭責任を否定する大衆書籍と歷史教材を製作･展示･販賣するということと共に神風特攻隊員の死を稱贊･美化する方向のエネルギーという事實に留意する必要がある。

映畵『ホタル』(2001)は昭和の死(1989年1月7日)を契機に神風特攻隊に對する問いを新しく提起した作品である。映畵全體を貫くモチーフは沈黙であった。その沈黙が果たして當然

なことかを探るためには加藤典洋と高橋哲哉間の論爭に注目する必要がある(加藤典洋、1997；高橋哲哉、1999)。高橋哲哉は自國の兵士たちが加害者であったとの事實を抵抗なしで認めるためにも自國の死亡者に對する追慕に先立ち戰爭責任が先決されなければならないという點を指摘した。高橋哲哉の觀點で言えば、映畵『ホタル』を貫くモチーフである沈黙は戰爭責任に對する認識の缺如ないしは回避に該當すると言うことができる。沈黙というのは社會(周邊國家)から孤立した自身(日本)だけの世界を意味し、それは結局、主體の未成熟を表わしているためである(박진한·강태웅·한정선·이택광·신하경、2013：101-133、195-222)。

特に“特攻隊機に乘った青年たちの心得”を强調した小泉純一郎の國會發言(2001年5月21日)は映畵『ホタル』の封切り(2001年5月26日)と關連して、再び9·11テロ(2001年9月11日)と關連して神風特攻隊に對する關心は增幅された(Tanaka、2005)。テロ發生直後、一部の西側のメディアは人間を武器としたという共通點を揭げて神風特攻隊とアル·カーイダ(Al-Qaeda)を同列に置き、9·11テロを第2の眞珠灣攻擊に比喩したりもした。さて、“特攻は自爆テロではない”という主張が揭げられている。神風特攻隊の対象が敵対する戰鬪員のみだったのに対し、自爆テロは対象として民間人などの非戰鬪員を無差別に巻き込む方式を取っているという違いがあるが、国際的な認識ではともに自殺攻擊または自爆として扱われ明確に区別されてはいない(Wikipedia、2015)。そもそも、“非戰鬪員を標的にしなかった”という日本軍の特攻戰術とは何だったのか。それこそ非戰鬪員と変わらぬ年齡の若者たちに、爆弾抱えた飛行機を操縦させ標的に突っ込ませる行為だったはずだ。神風特攻隊とはいわば、国民を“人間爆弾”として敵に投げつける国体による“国家テロ”だったのである。この根本的な事実を理解すれば、そして男としての矜持が残っているならば、自分たちの命をそのように扱った国体に向かって抗議すべきである。国民が国家の道具として扱われた時代を、どんなかたちであれ美化してはならないと思う。神風特攻隊を自爆テロとは異なる、なにか神聖なものとして差別化する企劃は深刻な問題である(戰争を語るブログ、2014)。

20世紀という時代に公式の軍事作戰として、正規の作戰命令として自爆攻擊を強いたというのは、アジア·太平洋戰爭末期の日本だけであった。これは大変に重たい事実である。そして、そのような作戰を採用したという事実は、公的にも私的にも強く否定されなくてはならない。戰後の日本と日本人は実際にそのような作戰を強く否定してきたのである。この種の特攻隊への畏敬があるレベルを超えて社会現象になってゆくことは、戰没者の魂に対して著しく非礼であるようにも思う(冷泉彰彦、2014)。

勿論、個々の特攻隊員が受けた苦痛への同情の念というのは否定することはできない。例えば実際に身内の中に特攻による犠牲者を出した家族の場合であるとか、特攻隊員の遺書や手記に触れたりした場合には、その個々の特攻隊員への強い畏敬の念を持つということはあるわけである。ここに重たいジレンマがある。つまり歴史的な評価としては全否定をしつつ、私的な心情としては個々の犠牲には畏敬の念を抱くという“重たいジレンマ”を背負わなくては、この問題に向かい合うことはできない。個々の犠牲への畏敬の念を考える余りに、“犠牲に対する尊敬のためには作戦や戦争の全体も肯定しないといけないのではないか？”と考えるのは誤りなのである。敗戦国としての日本が、戰爭に對する反省ではなく、負けた戦争の正當化をするということは、再び戰爭を宣言することになる(冷泉彰彦、2014)。それは、日本社會の病理といわれている他者への攻撃性と暴力性を強めている問題でもあり、そして民主主義と人權と平和の價値を否定･放逐する役割を果しているといわざるを得ない(佐貫浩、1997)。

4. 課題と展望

第2次大戦末期、旧日本軍が行った自爆攻撃を意味する<神風特攻隊>。このために投入された戦闘機<零戦>が最近、日本の大衆文化のサブカルチャーのアイテムとなっている。1970年代にパプアニューギニアのジャングルで発見された零戦を、2008年に日本の企業関係者が購入し、現地で6年間保管した後、昨年日本に持ち込んだ。翌月には実際に飛ばすと主張し、ウェブサイトを開設して募金イベントを行った。<日本人の零戦、再び日本の空へ>と銘打ったイベントには先月までに1018人が参加し、2344万円を寄付した。現在、専門業者による整備が行われており、その現況は随時サイトで公開されている。このようなブームの背景には、神風特攻隊を描いた映画『永遠の０』[7]がある。この映画は先月、日本アカデミー賞の作品賞など8部門を総なめにした。原作者の百田尚樹氏(59)は、安倍晋三首相(60)と親交のある右派の小説家だ。原作

7) 『永遠の0』という、この小説並びに映画は、悲劇への畏敬や追悼の思いを集団化したり、感動的なエピソードで盛り立てたりすることから決定的な問題を抱えている。それは、いわゆる特攻隊に対する評価である。特攻というのは搭乗員への死の宣告であり、同時に敗戦を前提とした自暴自棄的な作戦であり、敵側からは命がけで突っ込んで来る恐怖の存在であり、全体的には人道に反する行為である。ですから特攻作戦であるとか、レイテ戦以降の“全機特攻方針”などという軍の方針に関しては、最大限の非難と批判がされるべきだ。もっと言えば、アジア･太平洋戦争末期における特攻というのは、“戦争を終わらせることができない”軍並びに政府の指導者の責任感不足、指導力不足のために継続されたとしか言えないわけである(冷泉彰彦、2014)。

で百田氏は、一人一人の日本兵がどれだけ純粋な心をもって戦ったのかということをたびたび強調した(朝鮮日報、2015年5月22日)。

特攻を全否定する勢いで“個々の犠牲者まで戦犯扱い”するというような風潮があったのも事実で、それはその人がジレンマを背負うことができずに単純な回答に逃げたからである。特攻に関係した多くの人々や同世代人が沈黙を守ってきたのは、そのジレンマを語る難しさのためであった。問題は個々の特攻隊員の悲劇へ感情移入する余りに、特攻隊全体への同情や特攻はムダではなかったという心情を否定しきれていないことである。“個々の特攻隊員の悲劇”への畏敬の念を“個々ではなく全体への畏敬の念にしていきたい”、あるいは畏敬の念を“公的なものにして欲しい”、あるいは“集団で主張することを認めて欲しい”という思想性が見て取れる。こうした主張は、21世紀の日本という国を国際的な孤立へと追いやる危険のある“不必要な行動”である(冷泉彰彦、2014)。

知覽特攻平和會館は特攻と平和のぎこちない組合で組まれている。平和は世界普遍の恒久的な平和でなければならない。しかし知覽特攻平和會館はそうではない。アジア・太平洋戦争を15年戦争という流れ中で眺めておらず、日本の若者たちを死に追い遣ったことに對する反省の見解がなく、そのような殘酷な歴史を繰り返さないという確約もない(相星雅子、1992、2013)。神風特攻隊の壯熱ある行爲だけを表わし、語り、そこに感動を絶えず演出しようとする。神風特攻隊を描いた映画『永遠の０』はその代表的表象である。この映画では神風特攻隊員一人一人がどれだけ純粋な心をもって戦ったのかということを強調するだけである。このような特攻と平和に對するやり方は知覽の町(ひいては鹿兒島、ひいては日本)がいつでも第2、第3の特攻の聖地になり得ることを意味している。

知覽特攻平和會館と靖國神社の戦争と平和を語る方式が本質的には何の違いもないということに對してはその間、小泉純一郎、石原愼太郎、安倍晉三が先立って證明してみせた。日本の極右勢力は戦争犯罪を認めること、周邊國家に對して謝罪すること、それはまさに自虐だと感じている。そういう認識は日本社會の全般的な雰圍氣を主導して特に近現代史の知識が不足している日本の若者たちに誤った歴史認識を持たさせている。侵略と戦争を反對するという確約もなく、平和の本質と意味を再確認しようという教えもない。彼らが語る平和は世界普遍の恒久的な平和ではない日本特有の平和、ガラパゴス症候群としての平和であった。神の國という神話に閉じ込められて彼らだけの動力に變貌するガラパゴス症候群は戦争と平和に對する特有の解釋方式によく表われている。

【參考文献】

길윤형(2012)『나는 조선인 가미카제다 : 일본군 자살특공대원으로 희생된 식민지 조선인』서해문집

김효순(2010)「군국주의에 희생된 청년들 넋 팔아 관광특수」『한겨레』2010년2월17일

남상구(2007)「조선인 특공대원의 기억」『한일관계사학회 국제학술대회논문집』(2007년12월7일, 서울역사박물관)

노다니엘(2006)『우경화하는 신의 나라 : 일본 지배세력의 정신세계』랜덤하우스코리아

박균섭(2010)「쇼토쿠태자독법 : 전쟁、평화、교육」『교육사상연구』24(1)

박상희(2006)「평화헌법보다 더 위험한 교육기본법 개정」『말』245

박진한·강태웅·한정선·이택광·신하경(2013)『가미카제 특공대에서 우주전함 야마토까지』소명출판

정충신(2014)「갈라파고스 일본」『문화일보』2014년2월7일

相星雅子(1992)『華のときは悲しみのとき：知覽特攻おばさん鳥浜トメ物語』高城書房出版

_____(2013)「神風特攻隊の眞實を語り繼ぐ」http://peacephilosophy.blogspot.kr(2013年11月19日)

赤羽禮子·石井宏(2001)『ホタル歸る：特攻隊員とトメと娘禮子』草思社

岩中祥史(2012)『鹿兒島學』草思社

大貫惠美子(2003)『ねじ曲げられた櫻：美意識と軍國主義』岩波書店、이향철옮김(2004)『사쿠라가 지다 젊음도 지다 : 미의식과 군국주의』모멘토

_____(2006)『学徒兵の精神誌：<与えられた死>と<生>の探求』岩波書店、이향철옮김·보론(2007)『죽으라면 죽으리라 : 카미카제 특공대의 사상과 행동』우물이있는집

鹿兒島縣高等學校歷史部會(1977)『鹿兒島縣の歷史散歩』山川出版社

鹿兒島縣南九州市(2014)「知覽特攻平和會館」(2014年11月2日現在の展示館のパンフレット)

加藤典洋(1997)『敗戰後論』講談社

木村正人(2014)「「知覽からの手紙」(特攻隊員の遺書)は世界に伝わるか」『BLOGOS』2014年2月27日

金藏照雄(2003)『隼人の末裔：薩摩の男たち』春苑堂出版

佐藤忠男(1974)「特攻隊映畵の系譜」『シナリオ』30(9), pp.82-87

佐藤正典外(1997)『滅びゆく鹿兒島：地域の人々が自ら未來を切り拓く』南方新社

佐貫浩(1997)「日本における平和教育の展開：現代の到達點と今後の課題」『한신대학교한일평화교육심포지엄자료』(1997년9월18일-20일、아우내재단), pp.17-33

高橋哲哉(1999)『戰後責任論』講談社、이규수옮김(2000)『일본의 전후 책임을 묻는다 : 기억의 정치 : 망각의 윤리』역사비평사

知覽特攻平和慰靈顯彰會(2005)『魂魄の記錄：舊陸軍特別攻擊隊知覽基地』

中曾根康弘(2000)『二十一世紀日本の國家戰略：歷史の分水嶺に立って』PHP研究所、박철희옮김(2001)『21세기 일본의 국가전략』시공사

中曾根康弘·竹村健一(2003)『命の限り蝉しぐれ：日本政治に戦略的展開を』徳間書店

西浦進(2013)『昭和戰爭史の證言：日本陸軍終焉の眞實』日本經濟新聞出版社

百田尚樹(2006/2009)『永遠の０』太田出版/講談社

冷泉彰彦(2014)「『永遠の０』の何が問題なのか?」『ニューズウィーク日本版』2014年2月6日

朝鮮日報(2015)「自信と理想を失った日本人、神風特攻隊を美化」『朝鮮日報日本語版』2015年5月22日

朝日新聞(2014)「<平和への誓い新たに>戦没者追悼式·首相式辞の全文」『朝日新聞』2014年8月15日

産經新聞(2015)「特攻隊資料、今年も申請へ：記憶遺産登録で南九州市長」『産經新聞』2015年5月13日

日本經濟新聞(2014)「特攻隊員の遺書、世界記憶遺産に申請：鹿児島·南九州市」『日本經濟新聞』2014年2月4日

戦争を語るブログ(2014)「<特攻隊はテロリストと違う>と言い張るゼロリスト」『戦争を語るブログ』(http://blog.livedoor.jp/manfor/archives/51942478.html)(2014年1月25日)

Gorden、Andrew(2002)『*A Modern History of Japan：From Tokugawa Times to the Present*』Oxford University

Press、김우영옮김(2005)『현대일본의 역사 : 도쿠가와 시대에서 2001년까지』이산
McCormack、Gavan(2007)『*Client State : Japan in the American Embrace*』Verso、이기호·황정아 옮김(2008)『종속국가 일본 : 미국의 품에서 욕망하는 지역패권』창비
O、Yukie(2011)「Cultural Origins of the Kamikaze Special Attack Corps and the 442nd Regimental Combat Team during Word WarⅡ : A Comparison between the Japanese Soldiers raised in Japan and the Nisei Soldiers raised in America」Ph.D. Dissertation、Oklahoma State University
Office of Strategic Services Research and Analysis Branch(1945)「Japan's Secret Weapon : Suicide」http://foia.cia.gov/sites/default/files/document-conversions/89801
Ohnuki-Tierney、Emiko(2002)『*Kamikaze、Cherry Blossoms、and Nationalisms : The Militarization of Aesthetics in Japanese History*』University of Chicago Press
Tanaka、Yuki(2005)「Japan's Kamikaze Pilots and Contemporary Suicide Bombers : War and Terror」『*Japan Focus*』、Nov. 25th 2005
The Economist(2014)「A film about kamikaze pilots gives a worrying boost to nationalists」『*The Economist*』、Mar. 1st 2014
The New York Times(2006)「Shadow Shogun Steps Into Light、to Change Japan」『*The New York Times*』、Feb. 11th 2006
Wikipedia(2015)「自爆テロ」http://ja.wikipedia.org/wiki/自爆テロ(2015年7月10日檢索)

논문투고일 : 2015년 06월 10일
심사개시일 : 2015년 06월 20일
1차 수정일 : 2015년 07월 08일
2차 수정일 : 2015년 07월 14일
게재확정일 : 2015년 07월 20일

〈要旨〉

神風特攻隊と知覧特攻平和会館の読法

－日本の戦争と平和に対する誤った教え－

第2次世界大戦の末期に日本軍は神風特攻隊を組織して戦争を遂行した。神風特攻隊は特攻を支援した瞬間からすでに靖國神社の神としての地位を與えられた。日本の極右は神風特攻隊が誇らしく自爆したと主張したが、實際に愛國心があふれる操縦士が僅かはいたかも知れないが相當數はそうではなかった。鹿兒島知覽にある知覽特攻平和會館は數多くの觀覽客が訪れてくるほど人氣のある觀光地である。特攻の聖地という村のイメージが作られたのである。明らかにこの名稱は加害者日本に對する省察が缺如した名前である。特に知覽特攻平和會館は特攻作戰が展開した1945年の春(1945.3.26~7.19)を時間帶に設定した展示が成り立っている。アジア・太平洋戰爭を15年戰爭という流れ中で眺めておらず、日本の若者たちを死に追い遣ったことに對する反省の見解がなく、そのような殘酷な歷史を繰り返さないという確約もない。彼らが語る平和は世界普遍の恒久的な平和ではない日本特有の平和、ガラパゴス症候群としての平和であった。これこそ、戰爭と平和に對する誤った教えである。

Discourse on the Kamikaze Special Attack Corps and the Chiran Peace Museum for Kamikaze Pilots

－The Miseducation on the War and Peace in Japan－

Japanese army organized the Kamikaze Special Attack Corps and carried out the war in the last of World WarⅡ. The Kamikaze Special Attack Corps had been given to a god-like status and enshrined at the Yasukuni Shrine at the moment of the application for the job. Japanese extreme rightists insist proudly on suicide bombing of the Kamikaze Special Attack Corps, in effect considerable number of the soldiers did not agree with it. It is doubt whether there were full of patriotic spirit soldiers. The Chiran Peace Museum for Kamikaze Pilots is a popular tourist attraction in Kagoshima Prefecture. The village was made up an image the Holy Land of the Kamikaze Special Attack Corps. Obviously, the title is a lack of reflection on the Japanese assailant. Especially, the Chiran Peace Museum for Kamikaze Pilots is settled an exhibition as a time zone of 1945 spring(1945.3.26~7.19). They did not watch the Pacific War the inside of the current of Fifteen Years War. They also did not reflect that they drove out the young generation into death and did not make a definite promise to repeat cruel history. What they say the peace is Japanese's characteristic peace as a Galapagos Syndrome. It is not a world universal permanent peace. This indeed can tell a miseducation of war and peace.